

壹、医師になるまで

—医学部を目指された理由は？

親や高校の先生に勧められたからです。入れるし入ったって感じです。高校のときは生物学に興味があって、植物や動物を研究したいとは思っていたんですけど、医者になることを勧めてくれたお袋がそのときに倒れたんですよ。自分としては別に医者になろうとは思っていないけど、俺ががんばってお医者さんになったら元気になるかなって思って。

—生物の研究に未練はなかったのですか？

そういう道もあったのかなあ、って程度です。生物学をやるために京大理学部に入るための受験勉強なら、無理にしないでいいかなって思えるくらいの成績だったんです。だから、同じ受験勉強するんだったら、一番難しいところにしよう。で、受かってしまったと（笑）。そうしたらね、現金なことに、この間まで青黒い顔をしていたお袋が元気になり始めたんですよ。その時点で俺の京大医学部に対して求めていたものが達成されてしまったんです。だから俺は割と自由な気持ちで京大に入りました。

—大学でボクシングを始められたきっかけは？

勉強は受験でお腹一杯になるまでしたから、次は身体を鍛えようと思って。中高ではバレーボールをしていて、高校のときは全国大会に出るくらいだったんですけど、高2ぐらいになると主力メンバーがやめていったんです。それが何だかもったいなくて、大学に入ったら個人競技をやろうって思っていました。学生スポーツのアマチュアボクシングを5年間やって、プロのジムに通うことを決めました。友達が内科に行くのか外科に行くのか、「私は循環外科」「私は小児科」って言っているときに、俺はボクシングにしようかなと。

—プロにまでなられてなぜボクサーをやめられたのですか？

やっぱり上の方になると勝てなくて。嫁さんが生活費を稼いで、俺が昼間子どもの世話をして、彼女が会社から帰ってきたらジムに行くみたいな、自分としては幸せな結婚生活を送っていたんですけど、彼女が産休に入った瞬間に収入源が絶たれてしまったんです。プロボクサーとかいきがっても年収100万とか200万とかで、家賃も払えない。

—そこから医師になるまでの経緯を教えてください。

まず食うために働くんだったら食うものを作ろうと思って和歌山の田舎で農業を始めたんです。最初の年に米が1t取れたんですけど、高い米でも1kgで500円ぐらいじゃないですか。俺の年収は50万かと（笑）。そこは田舎で医者不足だし、お金がほしいから病院でバイトしていたんです。

ところが俺は友達が臨床研修（卒後研修）を受けているときにボクサーだったんで何もわからない。医者をやっているのが苦しくなったときに「漢方をやらないか」って誘ってくれたのが、今勤めている病院の前の前の院長。家族ごとごそと和歌山の山奥から引き抜かれて、京都で1年間漢方を習っていたんです。

それで漢方診療はできるようになったんですけど、聴診器の使い方とかレントゲンの見方とかは全くわからなくて、普通のお医者さんと全く話が合わない。話しかけたら走って逃げられたりとか（笑）。どのみち臨床研修を受けていなかったから、どこかの病院に行っても受けなきゃいけないから。京大病院は何だかハードルが高かったから、ボクシング部の先輩が働いていた病院に入れてもらったんです。そこは救急医療が強くて、救急の勉強を始めました。

略歴紹介

1974年京都府生まれ。東大寺学園高校を経て京都大学医学部医学科へ進学。6年時（1998年）にプロボクサーとなり、ウェルター級西日本新人王を獲得する。プロボクサーとして活躍する傍らで医師国家試験にも合格。29歳でボクサーを引退後、地域医療に携わる。東日本大震災直後から、宮城県気仙沼市立本吉病院へボランティアとして通う。2011年10月に同病院の病院長に就任、2014年3月に退職。その後はフリーの医師を経て、現在は京都市高雄病院にて地域医療室室長を務めている。



貳、医師になって

—今は具体的にどういった活動をされているのですか？

在宅診療や地域医療、総合診療をしていますね。いろいろな場所を転々としましたが、今は京都に戻ってきています。

さっき話した救急の病院はちょっと忙しくて、なかなか子どもに会う時間が取れなくなりました。子どもが起きる前に出勤して、子どもが寝てから家に帰る、みたいな。そんなことが続いたある日、朝出勤しようとする子どもに「また来てね」って言われまして。それがショックで、子どもに食わせるために働いているのにこれは本末転倒だな、と。

それで、ちょっとゆっくりした田舎の病院に移してもらおうと思って、知り合いの山形の病院の院長に電話したんです。その病院には、「外科」と「家庭」の研修コースがあって、どっちにするかと聞かれました。子どもの面倒を見れていなかったのも、家庭的な父親みたいなものに憧れていたんです。それで「家庭」の研修コースがどんなものかも知らないまま、響き・憧れだけで「家庭」の方を選びました。そこで「家庭医療」、いわゆる総合診療に出逢って、それで勉強しているうちにはまったんです。

—在宅診療では治らない患者さんを診ることも多いのでは？

俺が診る患者さんの多くは死にますね。もちろん高齢者だけでなく、障がいを持って生まれてきて学校に通えないような子どもも診ますけどね。

ただ、俺のモットーは「病気とは闘わない」。闘う人のそばにいる、みたいな。亡くなる人のそばにいる。家で育ってきた子どものそばにいる。かっこいい言葉を使う人は「寄り添う」って言うんです。

—いわゆる最先端医療とは違ったものですね。

いや、ある意味21世紀の最先端ではないかと思いますよ。そもそも生老病死というのはお釈迦様も言われるように避けられないもので、最初から負け試合なんです。だから闘わない。

でも人間っていうのはそれと闘いながら、もがき苦しみながら生きていくものなんですよ。俺はボクシングをやっていたからこういう例えが好きなんですけど、俺はリングの上で闘う「ジョー」じゃないんです。リングの上で闘っている



のは俺の患者さんなわけで、俺はリングサイドで「立つんだ、ジョー！」ってやっているだけなんです。それで治る人もいるし、真っ白に燃え尽きてしまう人もいます。もちろん辛いと思うことはよくあります。俺も一緒にあっちに逝きたいなっと思うこともあるんです。やっぱり、お別れってさみしい。

—在宅医療の面白さは何ですか？

今までの医療っていうのは当然病院が中心で、病院にいるとお医者さんや看護師さんが「先生」で、患者さんは「生徒」なんです。

在宅診療のいいところは、俺らが「ごめんください」って言って玄関を開けるんで、患者さんが主人で俺らが客なんです。病院と在宅の仕事では、主客転倒が起きているんです。これがすごく面白い。「患者中心の医療」って言葉がありますが、在宅診療では否応なしに患者が主人。そこで俺の「立つんだ、ジョー！」医療が初めて成立する。病院ではどうしても医者が偉そうにして主役になってしまいがち。もちろんそうならないように心がけてはいますけどね。

—医療の理想は患者中心の医療ですか？

こんなこと言うとまた怒る人が出てきそうですが、結局医療ってサービス業なので。かつて医療がサービスじゃなくて国の政策だった時代があるんです。富国強兵で、強い兵隊を作らなければならない、国民を頑丈にしなければならないという時代が。その頃は当然、医者というのはお上だったんです。今はそういう時代じゃない。よく金を稼ぐ国民を作るために医療があるのではない。だから、サービス業って言うても間違いじゃないのかなと。

参、震災復興支援

—東日本大震災のボランティアに行こうと思った理由は？

震災当時は山形県の、さっき話した田舎の病院で働いていました。それで、隣の県が減茶苦茶で大変だと。助けようという気持ちももちろんありましたが、それより気になるじゃないですか、毎日TVでやっているし。一回見に行かないといけいなあと思ってボランティアに行ったんです。

そこで心の準備をせずに、瓦礫まみれで何かの腐った臭いがする現場に飛び込んでしまって、ショックを受けたんです。初め、興味本位で突っ込んだのを恥じて、反省して、何か役に立たないといけないなと本気で思いました。それでボランティアを続けていたら、残ってくれて言われて、気付いたら成り上がりで本吉病院の院長になっていました。



▲川島医師が院長を務めていた本吉病院。現在も定期的に訪れ現地医療を支援している

肆、京大生へメッセージ

—今の京大生にひとことお願いします。

多分、今の就職活動とかって、どこどこ会社に入るとかっていうのが重要な目標だったりするのかもしれないけれど、俺はそういう「どこに入る」とかじゃなくて、自分の入った場所で力を発揮してほしいなって思います。どこに入るかではなくて、今自分のいる場所ってきつとご縁というのがあるはずなので、入った場所で力を発揮してほしいですね。もし選ぶとしたら、自分がのびのびと力を発揮できる場所を。

—ありがとうございました。

—現地で感じたことはありますか？

まさに津波が来た病院・町で働いていたわけですけど、そこには津波で死んだ人か九死に一生を得た人しかいないんですよ。みんな友達とか家族とか子どもとかを亡くしているから、ものすごく死が身近でした。

俺は被災地で在宅診療を始めたんですけど、家で人が死ぬって大変なことで、最初はその地域からの反発や抵抗みたいなものを感じたんですよ。それまでは、手に負えなくなったら病院へ、というのが当たり前でしたから。そこで「死ぬのは当たり前だから家で死んだらいい」っていうのははっきり話せたのは、あそこが被災地だったからだなと強く思うんです。京都だとみんな固まるんです、当たり前ですけどね(笑)。でも病院のナースステーションですら、「いや、死ぬから」って言ったらみんな固まるんですよ。なるほどと、ずっと受け入れてもらえたのは被災地だったからだろうな、と。

あと、四十九日とかの法事あるじゃないですか。3月11日なんて何万人が死んでいるから町中で法事するんですよ。あれってただの儀式だと思っていたんですけど、1ヵ月前まで亡くなった人のことを思いながら泣いていたおばあさんが、一周忌の法事をあげてから泣かなくなったんです。だから、葬式仏教なんてみんな馬鹿にするけれど、わりと大事なんですよ。医療の世界では「グリーン・ケア」って言うんですけど、それを体験しましたね。

